

明治六年十二月

琉球藩取調書類土方大内史へ回附ノ件

外務省

三島啓

振球爲多領之是教子之是也  
由中越之方致之在古之あり  
可也少向也其子也其也

明治六年 外務省

三島啓

三島啓

外務省



六〇五號

臨時議院

其後二時有人由出有...

明治六年

三月

外務省

海軍省

與那國

外務省

明治六年十二月

琉球藩王へ  
聖上皇太后皇后ノ御賜下賜ノ件

外務省

REEL No. 1-0319

0357

十二月十三日

六分五厘内は

乙未年十二月九日

外務省

要領

印

右局

御  
捕

御  
印

高橋徳彦侯爵外務少輔

聖上皇太后皇太后御真揚額可致  
分毫指之琉球藩王に賜り信條  
を巡照。輝燿宮及び在東京に在る之  
を清皇に在後。御船送る可致。二百  
奉送。高橋徳彦侯爵に及は。此及。御  
命也。

外務省

明治六年十二月九日







十二月十七

輔

西領記濟

言乃

孫球女潘下賜可如奉

沛三方以賜其之義、身重乃其掛

合之趣致承物決別

聖上皇位定之法分去之業以之

法四之中其案法流在乃之在尤

皇方所定之法分之法皇位承承次

中修乃法四之中一也乃及乃法四

三十九

三十九

宮内省

明治六年十二月十七日

宮内省代理

宮内省輔善司長 藤田 芳

外務省輔善司長 野景 龍

寫濟

琉球藩王白

琉球藩王白

主上

皇后御写真拜領之旨付御有込合

身存右身藩王御禮成合

事英國王威下及身御也

明治二年十二月十九日

琉球藩

典昭原親方



外務省

律

琉球藩

御禮之儀者藩王官内卿へ

書了謝詞執奏了請之書翰有

被呈出玉事

明治二年十二月十四日



寫濟

外務省

外務省

外務省

外務省

外務省

外務省

外務省

外務省

外務省

外務省

外務省

外務省

皇太后宮御寫道二面

親系那系長樂一古海

子孫

外務省

外務省

外務省

寫濟

皇太后宮御寫真御一面  
右御下賜少所<sub>以</sub>對正<sub>ニ</sub>拜裁  
仕<sub>由</sub>也

明治七年二月廿二日

孫球齋

興形原親



外務省

沙中

琉球藩

不取原良條及

外務省

皇太后宸冲寫真

一函

若下賜少奈本藩、致送可致事

明治七年三月廿三日

外務省

自明治六年十二月

琉球藩へ郵便開線ノ件

外務省

REEL No. 1-0319

0367

大藏省

辨事局

以輔  
仙舟  
存

寫濟

後陸奥の船運年遠に及んで其の不便  
所制可申す事用而當其申す事  
達し其の申す事申す事申す事  
同書の内容を輕便船が港に停着日家  
者海に運送する事也

但し陸奥の船運内地に輕便船を  
運送する事申す事申す事申す事  
三船一名一船の申す事申す事申す事  
申す事申す事申す事申す事申す事

大藏省

明治二十七年七月廿七

前島驛通頭  
寺島外務卿殿  
上野外務省轉付





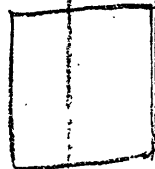
漕可致令中出并漸次増来之旅客  
運漕之物貨増加并隨之増壞之及敷  
もお船の中は好せりし多敷之種甚  
難給且隔月之通船も之の四条但  
絶之憾と相減之は趣意より一端之美と譽  
内の人民之對之は休裁を好む者も  
子國之之實額自是割之と通船お船  
年之間同會社に下り渡連之強欲  
採改之及否制の之と各港港之  
形其他約束規則等詳細を為す  
大藏省

大藏省事務總裁  
参議大隈重信

大政大臣三條實美殿

伺之通

明治六年正月四日



鳥濟

東京琉球及沿各港郵便蒸氣船往復日割表

部 之 往																			
五	四	三	二	一	三十	廿九	廿八	廿七	廿六	廿五	廿四	廿三	廿二	廿一	廿	十九	十八	十七	十六
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
			琉球國那霸發泊	午前八時琉球國那霸入港	午前六時大島名瀬出帆	午後五時大島名瀬入港	午前六時鹿見島出帆			鹿見島發泊	午前十時鹿見島入港	午十二時細島出帆	午後六時日向細島着	午前七時發帆 <small>神寄港 同寄出帆 大坂琉球往復船</small>	大坂發泊	神寄港大坂入港	航海	航海	東京出帆 <small>横濱寄港 同寄出帆 東京大坂往復船</small>
部 之 復																			
廿五	廿四	廿三	廿二	廿一	廿	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
				東京大坂往復船東京入港			東京大坂往復船 継替	大坂發泊	午前二時神寄港日向大坂着	航海	午前六時細島着午後二時日向出帆	午前六時鹿見島出帆			鹿見島發泊	午後五時鹿見島入港	午前六時大島名瀬出帆	午前八時大島名瀬入港	午前六時琉球國那霸出帆

Handwritten text on the right margin, possibly a date or reference number.

寫濟 (Sei)

陰世為... 教... 可... 也... 及...  
Handwritten text in the right column of the main frame.

Handwritten text in the middle column of the main frame.

Handwritten text in the left column of the main frame.

大藏宮 (Daizōgū)

明治七年一月十六日

御輔

御奉

御録

寫濟

船航通、自今迄、六回、輕便  
同船、海商、所、建、通、高、友、友、  
同、廣、出、強、為、致、於、有、不、強、  
條件、及、此、根、據、於、來、以、其、見、世、  
之、於、了、未、之、也、達、方、以、在、針、一、且、  
至、急、也、回、答、者、了、後、也、也、

明治七年一月十六日 内務卿大保利通

一月十日

大藏省

外務卿寺内宗男殿

一 首里并那霸港に於て土人中  
 其任に於て南考を以て郵便  
 取扱役と申す本邦及同属  
 性後郵便に於て勞を蒙る者  
 致す  
 一 同属に於て郵便掛友交を置  
 き同地郵便一切に於て勞を蒙  
 る者一 此に於て達且同属  
 在り此者友交に傷を蒙る者  
 月郵便に於て勞を蒙る者  
 大藏省  
 此探に達者に於て  
 一 首里及那霸港郵便役所を  
 造る建築に於て南考に於て  
 若郵便取扱役を自宅或は  
 郵便局を兼り船會社出張所と  
 爲る郵便役所を以て設置す  
 一 同属内地に適當な郵便線路  
 と通し沿線各所に郵便役所  
 或は取扱所を置き其郵便取  
 扱役は前案に如く土人中

大藏省















五 五 一 清

多留滞琉中右交人極上陸言、徘徊  
又ハ兼行小等ノ頓伏而シテ反端ノ慮アリ  
也依頼多也

明治七年月

孫 孫 孫

此 邦 宗 親 方



外務省

以中

廣分早四子

補

書考占

今般琉球藩船便船後字相成  
以從復之船之外國人之氣胆在時  
付只自然獨出浮遊又之想好お  
以多一言性之不通より不急之旨  
速亦可生也能計旨より回る備極  
相流此を又之能性子可成煙物  
之み生指其の筋相違是之申  
依之此如及回る能也  
七年一月五日 前嶋輝道親

一月九日 和十九日

内務省

山口外務少輔



輔

計等級

等四下

右

別紙姓名を以て琉球に在る一般の臣

に之を依り即ち郵便取扱役と名付

居せしむるに頭書に由りて取扱役等級

申すに尤二等取扱役等級に官等

十四等四等取扱役等級外一等は

以て之を依りて右に官に之を親雲上等

に身の上を以て等級に依りて都令に

依りて之を以て之を依りて一應に

此の及ぶに依りて之を以て之を依りて

内務省

同回奉りて之を以て

七年四月十九日

郵傳省前場長

外務卿吉島宗則殿

別紙

二等郵便取扱役

首里府

喜友名里に之を親雲上

同

那覇港

波之地里に之を親雲上

四等日

今帰信

仲本筑登に之





Vertical handwritten text on the right side of the page, possibly a date or reference number.

辨事局

右 内 外 省

寫 齊

Main body of vertical handwritten text within the grid, containing the primary message or report.

外 務 省

明治六年十一月

琉球藩在京官員身分教任に當ル者ノ有無  
式部寮ヨリ照會ノ件

外務省

与式部

式部寮

琉球藩官負當時在幕者其  
身分勅任に當り者ハ多し或ハ應及  
法問多し否至急是等方と雖也

享和の年

式部寮

外務省

山

寫濟

十二月四日

太政官

式部省

乙方二千五百一十口

辨事局

弁事局

東の

要領

寫濟

琉球藩管の在官の官吏兼任  
此の富の者有世の同虎の交親注  
日勝主在藩主の兼任者  
此の富の者在世の同虎の交親注  
此の富の者在世の同虎の交親注

十二日

信言表位は富の者現存左初九  
ハ此の富の者在世の同虎の交親注

外務省